

主催：県立神奈川近代文学館／（公財）神奈川文学振興会
共催：東海大学文学部文芸創作学科／後援：月刊『望星』

小島ゆかり ◎歌人

辻原登 ◎作家

長谷川權 ◎俳人

半歌仙

『ほめられず

苦にもされぬ

ナマコの巻』

昨年十一月四日に神奈川近代文学館で開かれた第十四回湘南連句座談会。三人の選者の「発句」「脇」と第三から第六句に続けて、参加者が楽しみながら句をつけ、半歌仙十八句を巻き上げた当日の様相をレポートする。

海鼠はホメラレズ……？

長谷川 本日はお越しいただき、ありがとうございます。すでに表六句が巻き上がっているので、そのつけ筋からお話したいと思います。今回の発句は僕ですが、「ホメラレズクニモサレザル海鼠かな」。——普段から海鼠のような軟体動物になりたいと思っています。世の中から忘れられて、海の底でゴロゴロとしていたい（笑）。「ホメラレズクニモサレザル」は、宮沢賢治の『雨ニモマケズ』の中にあるくだりからそのままもらってきて、海鼠に合わせました。それに小島ゆかりさんが脇をつけてくださいました。

小島 長谷川さんの発句を読んだ途端、この海鼠の前世は宮沢賢治だったに違いない、と思いました。創作者の賢治が、自分の作品に愛着を寄せる気持ちの中には、大きく銀河があるだろう、と。ご存じのように海鼠は見た目も少し銀河色。そんな形を思い浮かべながら、「夢は真冬の銀河を泳ぐ」。松尾芭蕉の句「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」のことも、ちらっと思い浮かんで、こんな脇をつけました。

長谷川 続く第三は辻原登さんです。

半歌仙『ほめられず苦にもされないナマコの巻』

〔初折の裏〕

発句 ホメラレズクニモサレザル海鼠かな 權 (冬)

脇 夢は真冬の銀河を泳ぐ ゆかり(冬)

第三 踏切のそばの屋台に女ゐて 登 (雑)

四 問はず語りに酒温めん 權 (秋)

五 風の音の遠野の森に月のほり ゆかり(秋月)

六 アレッポの空に秋はかたむく 登 (秋)

〔初折の裏〕

初句 せつげんの匂いにふりむく山手線 登紀和(雑)

二 オラウータンが手をつなぐ初夏 由美 (夏)

三 彼の人とさるすべりなどなでてみる 満丸 (夏)

四 僧侶の声の響く回廊 久美子(雑)

五 久々に床屋の親父に顔見せる 乃里子(雑)

六 居眠りをして作る湖 菜々 (雑)

七 はるぼるとフィヨルドの谷に冬の月 乃里子(冬月)

八 ヒトラーの船イカリをおろす 茂樹 (雑)

九 地球儀をほうりなげては遊ぶ人 アラン(雑)

十 犬の鼻先草は青みて 久美子(春)

十一 泥棒も警察もゐて花の下 一郎 (春花)

折端 柳絮のごとくまたどこかへと アラン(春)

辻原 僕は長谷川さんとはまったく違う観点で、発句を捉えました。古来、海鼠は非常に貴重なもので、中国が明の時代、日本からの最大の輸出品が乾燥海鼠でした。実はすごく役に立って、褒められていたわけです（笑）。今でも、海鼠の卵巣を塩漬けにした「くちこ」は酒呑みにはたまらない珍味。そこで僕は「踏切のそばの屋台に女ゐて」。傍らに屋台があり、おかみがとてもきれいな人で（きれいでなくてもいい）、踏切の音を聞きながら一杯やる。そんなイメージで第三を詠みました。

長谷川 なるほど。僕はお客さんが女であると受け取り、（四句目）「問はず語りに酒温めん」とつけました。踏切のそばの屋台なので、そこを出たら女の人は踏切に飛び込むかもしれない。何か深刻な悩みを抱えている様子の女を思い浮かべました。それを屋台の親父さんが察して、その女性が語ることに耳を傾けながら酒を温めている、しんみりした場面を思い浮かべました。小島 お二人は女の人にググッと気持ちいが傾いていますけれど（笑）、私はこの「問はず語りに」で『遠野物語』を思い出しました。お酒を温めながら語っているのは、柳田国男と佐々木喜善だろうと思ひ、（五句目）「風の音の遠野の森に月のほり」とつけました。「風の